

# 東 北 地 方 の 観 光 開 発

横 山 弘

## 1.) 東北地方の観光の特徴

東北地方の観光は自然的観光資源が中心をなし、文化的観光資源は副次的である。都市化の急激な発展によって、都市的生活の煩雑さに飽きを感じている人々に、人工の加わらない原始的の景観や動植物を豊富に提供してくれるのが東北地方の観光資源である。自然的観光資源の中でも山岳自然公園が東北地方には多彩である。東北地方の中央部を南北に走る背梁山地に北部から下北国定公園、十和田、八幡平国立公園、栗駒国定公園、蔵王国定公園、鳥海国定公園、磐梯朝日国立公園および日光国立公園の1部が分布している。また海岸自然公園には岩手県と宮城県にまたがる太平洋岸に延長約150Kmにおよぶ陸中海岸国立公園がある。国立公園および国定公園は一般大衆の保健・休養・教化の利用と自然保護という2つの性格をもっている。東北地方の各公園の性格を見ると、自然保護公園の性格をもっているのは八幡平地区、鳥海山地区、栗駒山地区、下北半島地区、燧岳地区などで利用公園の性格をもっているのは陸中海岸地区、出羽三山地区、吾妻地区、蔵王地区などである。これらの自然公園の多くは豊富な温泉をもっており、観光的価値を高めるほかスキー場をもつものも多い。したがって、四季を通じて利用出来るレクリエーションの豊庫でもある。文化的観光資源は自然的観光資源と比較して量的に少ない。すなわち、東北地方は文化的には後進性を示し、関東や関西におけるような歴史的遺蹟、神社、仏閣などの文化的遺産が少なく、東北を代表するものとしては平泉の中尊寺・毛越寺、出羽三山の山岳宗教に関するものをあげる程度である。その反面、民俗に関する観光資源は比較的豊富であり、下北半島や男鹿半島、田沢湖や奥只見などに今だに残されている古い信仰や行事などに吾々のふるさつを見るような気持で、それを求めてやってくる観光客も年々多くなっている。

## 2) おもな観光地

### 十和田・八幡平国立公園

この地区は2つの地区からなり、1936年に十和田地区が国立公園の指定をうけ、その後1956年に八幡平地区が追加指定された。十和田地区は典型的なカルデラの十和田湖を中心として、その北部の八甲田山を含み、湖水から流出する奥入瀬川の溪流など豊かな自然景観を具えている。湖水の神秘さに湖岸をめぐるカルデラの外輪山は急崖をもって湖水にのぞみ、春の新緑、秋の紅葉と景観がすばらしい。八甲田山は北八甲田と南八甲田の連山からなり、北八甲田は八甲田六岳を主峰に10峰からなり、南八甲田は楯が峰を主峰として8峰からなってい

る。これらの諸峰は那須火山帯に噴出した火山群で、山形は円錐状または屋根形をしている。植物も森林、お花畑、湿原植物、芝原などと多様性を示し、標高をますごとに亜高山帯、高山帯と様相を変えている。八甲田山の観光は春の新緑、夏の登山、秋の紅葉と多くの観光客を迎えているが、冬もスキー場として年間100万人以上の客を受入れている。

八幡平地区は岩手山、駒ヶ岳の高山植物、八幡平の高原と樹氷からなっている。八幡平頂上付近から源太森にかけて比高20mのテーブルランドを形成している。アオモリトドマツを主とした高山性の針葉樹林、日本アルプスでは2500m以下で見られないような高山植物群落、湖沼、湿原、噴気、噴湯などの火山活動をともなっている。付近には松川・藤七・網張の温泉地があり、登山・キャンプ・ハイキング・スキーとその利用客が多い。

#### 磐梯朝日国立公園

この国立公園は1950年に指定され、磐梯・吾妻地区と朝日・出羽三山地区、飯豊地区の3地区からなっている。磐梯・吾妻地区は磐梯山・猪苗代湖・吾妻山を含み、福島県内では最も観光客を集めている地区である。磐梯式噴火として有名になった磐梯山は、爆発の際の泥流でせきとめられた桧原・秋元・小野川湖をはじめ、五色沼などの湖沼群を北麓にもって、南側には美しい裾野を広げてスキー場となっている。断層によって形成された猪苗代湖は清澄な湖水をたたえ、夏の避暑地となっている。吾妻山のうち一切経山・吾妻小富士付近は火山活動が新しく、地形の変化にとんでいるので早くから観光客をひきつけ、1959年に磐梯吾妻スカイラインが開設されてからにわかに観光客が多くなった。一切経山・吾妻小富士に囲まれた浄土平は多数の噴気口があり、付近は黒い岩塊と裸地が広がり異様な様相を示している。スカイラインを利用する観光は福島駅前からバスの便があり、信夫高湯にはゴルフ場の施設もあって、避暑に利用され冬はスキー客も多い。磐梯高原はバンガロー・キャンプ村の施設があり、海拔高度800mを越えるため夏の避暑地となっている。朝日・出羽三山地区は自然保護公園的な朝日岳と山岳信仰の名残をもつ月山・羽黒山・湯殿山の出羽三山を含んでいる。三山信仰は月山の山岳信仰から始まり、中世には羽黒山の修験道が盛んになり、近世には東国三十三ヶ国の総鎮守となった。その名残りが今に続き信仰を目的とする人々のほかに、登山を目的とする観光客が増えている。

#### 日光国立公園

この地域の代表的観光資源は尾瀬ヶ原と燧ヶ岳である。尾瀬ヶ原は幅2Km、長さ8Kmの盆地で湿原植物におおわれている。この盆地は北東部が福島県に属しているが、大部分は群馬県に属している。湿原は標高が1380～1400mであり、燧ヶ岳・景鶴山・あやめ平などの火山に関連して生じた地溝といわれている。また、只見川の水源地となっており、燧ヶ岳の熔岩流が只見川の上流をせきとめてできたものと見られる。尾瀬ヶ原には数多くの池塘があり、こ

ここにミソガシワ・ヤチヤナギなどの高原性の湿原植物が展開している。燧ヶ岳は尾瀬沼を南麓にもつ火山で2346mの標高を示している。しかし、尾瀬ヶ原からの比高は970mで登山は容易である。山腹の林相は見事で、頂上に近いところには見事なハイマツが見られる。

#### 下北半島国定公園

下北半島の恐山を中心とした山地一帯と尻屋崎及び大間崎の先端部、西海岸の仏が浦を含む地域が1968年7月に国定公園に指定された。恐山は那須火山帯に属し、中央に直径4kmのカルデラをもっている。カルデラの中に直径約2kmの宇首利湖をもっている。水色は青緑色を呈し、強酸性(3.5P・H)のため魚族はわずかにウグイが生息しているだけである。周囲には硫気孔や水蒸気を噴出し、植物が育たないため、荒涼たる景観を呈している。この一角に円通寺があり、津軽や南部地方の霊場として信者が多く、7月下旬の祭典には多くの参詣者で賑わう。尻屋崎は下北半島の先端にあり、本州最涯地あるいは最北端の地というキャッチフレーズで旅行者を魅了している。どちらも海食台が海岸までつづき、豪快な自然景観を示している。西海岸の仏が浦は海岸約3kmにわたる凝灰岩の海食崖が海にせまり、海食をうけて様々の奇岩怪石をつくっている。岩にそれぞれの形にちなんで、五百羅漢・観音岩・十三仏・如来の首などと仏の名前をつけている。この海岸の南に野猿の北限地として有名な脇野沢村があり、野猿の餌つけに成功して観光に一役かっている。

#### 栗駒国定公園

この地域は宮城・秋田・岩手・山形4県の県境にあり、栗駒山・荒雄岳を中心とした山岳自然公園で、1968年に国定公園に指定された。栗駒山は標高1628mのコニーデ火山で、岩手県側からは谷が上流まで開け、早くから登山コースとなっていた。現在は自動車道が開発されて、宮城・秋田側からもアプローチが容易になった。国定公園指定以前は宮城・秋田両県の県立公園に指定され、自然地域が大きな魅力となっている。山頂付近には長さ2.5kmにおよぶ大雪溪が7月まであり、春山スキーを楽しむことが出来る。山腹のブナ原生林、高山植物が見事である。栗駒山頂から南へ5kmのところ南北600m、東西300mの湿原があり、世界谷地とよばれている。成因的には泥流凹地の一種で、泥炭層の厚さも2.5mに達する。荒雄岳を中心とする地域は温泉地・保養地として知られており、男釜女釜・吹上温泉など有名な間欠泉をもっている。荒雄川支流の大谷川峡谷は新緑・紅葉の両時期にハイキングコースとして観光客が入りこむ。この地域はスキー場としても全国的に知られ、7つのスキー場をもっている。

#### 蔵王国定公園

1963年国定公園の指定をうけたこの地域は利用公園としての性格をもち、夏山登山とスキー、温泉保養地として観光客を集めている。登山も蔵王を横断する山岳自動車道路エコーラ

インができてからは容易になり、観光客が増加した。火口の御釜や賽の碓の熔岩台地など、火山地形の特徴がいたるところに見られ、コマクサやガンコウランなどの高山植物も見られる。刈田岳から杉ヶ峰・芝草平・屏風山にかけての西斜面はアオモリトドマツの自然林が冬季に樹氷地帯となる。スキー場は宮城県側と山形県側の両方にあるが、宮城県側は交通の便が悪く、宿泊地も遠いため、山形県側に比べてスキー客は少ない。山形県側は12のゲレンデがあり、温泉をもつ宿泊基地が近いため観光客の入込数は年々増加している。蔵王温泉はスキー客の増加にもなって冬の観光客が圧倒的に多い。

#### 陸中海岸国立公園

岩手県の太平洋岸普代から釜石までの海岸部が1954年に国立公園に指定され、1964年にその以南と宮城県の唐桑町と気仙沼市が国立公園に指定された。この陸中海岸は官古以北が隆起海岸で海食崖が連なり、その背後は海岸段丘となっている。官古以南が沈降海岸で屈曲の多い複雑な海岸線を形成している。海岸はアカマツを主とする自然林が生育し、海食崖にはハイビクシンヤシロバナジャクナゲの大群落が見られる。浄土浜一真崎間の遊覧船による探勝は陸中海岸の圧巻である。南部陸中海岸では冬にツバキの花が咲き観光客を楽しませる。

#### 鳥海国定公園

鳥海山を中心として、象潟から庄内海岸および飛島を含む地域である。山岳と海岸を合わせもつ観光地で、その景観は変化にとんでいる。鳥海山は標高2230mで北奥羽第1の高峰で、山体は富士山と似た容姿を示している。北西麓の象潟付近の地形は鳥海火山からの泥流と海食作用によって形成されたもので、松島のような景観を示していたが、地震によって地盤が隆起したため潟はなくなった。現在天然記念物に指定されている。

### 3) 東北地方の観光施設

観光地に旅行者を誘致するには観光施設の充実をはからねばならないが、通常観光施設としてあげられるものに交通施設、休憩食事施設、野外活動施設、文化施設などがある。東北地方の交通施設を見ると、専用自動車道の路線数は全国比で28%、有料道路は9%、一般自動車道は6%で比較的充実しているが、その他はまだ充分でなく高速自動車道は一つもない状態である。しかし、山岳自然公園が多いことからして、リフトが14%、ロープウェイが8%と高い比率を示している。水中翼船やホーバークラフトなどの水上交通機関が見られないのは、東北地方の観光地に海洋公園の少ないこと、まだ未開発であることを物語っている。次に休憩食事施設を見ると展望施設が14%、ヘルスセンターが13%、ドライブインレストランが10%といずれも10%以上の比率を示している。観光会館は5%でまだ十分に普及していない。東北地方は温泉が多いこと、湯量の豊富なことからヘルスセンターの比率を高めていると思われる。次に、宿泊施設であるが、ホテルの比率は4%、旅館9%と低い値を示しており、国際

観光地として海外旅客を誘致するにはまだ施設が十分でないが、国民宿舎11%、ユースホステル10%で国内の観光客、とくに若い年齢層を誘致するには適応していると見ることができている。登山やスキーのための観光地が多いため、山小屋・避難小屋の比率が13%と高率となっているものと思われる。野外活動施設としてはスキー場15%、国民休暇村15%、青少年旅行村18%、国民保養センター25%、自然休養村22%、フィッシングセンター21%、青少年スポーツセンター25%などと高い普及率を示しているが、ゴルフ場6%、ヨットハーバー1%、遊園施設5%と低いのは冬の寒冷積雪などの影響であると思うが、未開発の点も考えられる。最後に文化施設について見ると、植物園が21%と高い比率を示し、温泉熱の利用の容易さからきているものと思われる。それにくらべて動物園9%、水族館10%はやゝ低くなる。美術館は16%で高い比率を示し、博物館も8%でこれらに対する観心の高まってきたことを示すものである。

#### 4) 観光客入込数

昭和46年における東北地方の観光客の入込数の最も多いのは福島県で2,540万人を数えている。次が山形県で2,241万人、秋田県1,905万人、宮城県1,728万人、岩手県1,234万人、青森県763万人の順になっている。東京から遠ざかるにつれて入込数も減少しているが、距離的な問題だけでなく気候的制約も関係していると考えられる。福島県の観光地の中では磐梯高原が最も観光客入込数が多く12%を占めている。多彩な自然景観が観光客を誘致しているのである。次が磐梯吾妻スカイラインで7%を占め山岳観光客の多いことを示している。山形県の観光客入込数の多いところは山岳観光地で、温泉とスキー場を合わせもつところで、約50%の入込数を示している。山岳観光地の中で蔵王が18%の入込率を示し、スキーと温泉を目的とした観光客が主体をなしている。名所旧蹟観光地は35%となっている。秋田県の観光地では都市観光を目的として訪れる客が25%、行事観光を目的とするものが19%と多い率を示している。それに対して自然景観を求めてくる客は男鹿半島が15%が一番多く、田沢湖が9%、十和田湖7%、八幡平5%の順となっている。宮城県の観光地では依然として松島が観光客入込数が多く、30%を占めている。交通の便がよく手軽に行ける安易さが比率を高めているものと思う。それに次ぐのが男鹿半島、金華山で18%、蔵王13%、玉造温泉郷12%、二口峡谷7%の順で、蔵王の順が低いのは山形側からの登山の便利さに比較してやゝ劣るためである。岩手県の観光地では陸中海岸の観光客入込数が最も多く21%を占めている。東北地方の海岸国立公園はこのみで、広くダイナミックな点が魅力となっている。次いで八幡平が12%、平泉が9%、花巻温泉郷が8%の順で、史蹟観光地としての平泉が東北地方では重要な観光客の誘致力となっている。最後に青森県の観光地では十和田国立公園が最も多い入込数をもっており、26%の比率を示している。青森県の観光地を代表していると云える。

次いで下北半島が12%、大鱒碓ヶ関が10%、岩木山が9%という順である。下北半島は本州最北端の地というノスタルジアをかんじさせることや、古い民俗習慣の名残りを見られることなどが魅力となっている。以上を通して見ると、東北の主要観光地の誘致圏は東北、関東が90%を占めており、東北地方の中でも北東北は関東の割合が20%、南東北は30%以上で、とくに磐梯吾妻は東北36%に対し、関東53%という数値を示し、市場性の差を示している。

#### 5) 観光開発

温泉地の開発、東北地方の温泉は湯量、泉質、泉温ともにすぐれた素質をもっており、自然環境も野外レクリエーションに適している。現在は湯治型の温泉地が多いが、再開発によって総合温泉都市型へと発展させることが必要である。総合温泉都市の素質もっている地区は磐梯・吾妻高原、蔵王高原、栗駒山麓、八幡平山麓などがあげられ、全国的には海岸部に大型温泉地があるが、東北地方は山岳高原部に見られることは特徴的である。

高原観光地の開発、東北地方においては8月の月平均気温22℃以下の地域は、標高100～700mの間に分布しており、十和田、八甲田、八幡平、磐梯吾妻の国立公園とその周辺に高原が分布している。これらの地域はかなりの積雪があり温泉も多い、これらの地域が南北にのびる主要交通幹線に沿って分布していることは、将来オートキャンプ場として有望である。

スキー場の開発、東北地方は積雪、地形に恵まれているが、リフト総延長の開発はまだ遅れており、そのうちの70%が磐梯吾妻・蔵王で占められている。これは市場性の不利からきているもので、背稜山脈沿いの交通路が整備されればスキー場開発の可能性が十分にある。

キャンプ場の開発。東北地方は低密度利用の土地が豊富で、自然資源に恵まれており、理想的なキャンプ場が建設される可能性もっている。キャンプ場はキャンプ指定と固定キャンプ場に大別出来る。キャンプ指定地はキャンプの場所を指定したもので、周辺の自然を荒らしたり、火災や不衛生の問題を起しやすい。固定キャンプ場がのぞましいがこれには一般キャンプ場、サイクルキャンプ場、オートキャンプ場などがあるが、これからはサイクル、オートキャンプ場が大いにさかんになることと思われる。